
いつかの夕立

ワタハウシ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
いつかの夕立

【Nコード】
N7742E

【作者名】
ワタホウシ

【あらすじ】
夏。小学生の頃まで暮らしていたこの田舎町に久方ぶりに帰ってきたのは、ほんの気まぐれだった。しかし、突然な雨奇妙な少女との出会い、過去の記憶、無計画な旅行はその意義を変えていく……

山の朝は清々しい。耳心地のいい小鳥のさえずりと耳障りなセミの声を同時に聞きながらだらだらと散歩するだけで辺り一面の緑が和みと一日の活力を与えてくれる。生い茂る木々はさわやかさと同時に吸い込まれそうな妖艶さを孕んでいて飽きが来ない。深呼吸するとマイナスイオンを体内に取り込んでいるような感覚に襲われる。まあ実際にマイナスイオンが発生しているかどうかは俺の知るところではないがこういうことはそんな感じがするつてのが重要なんだと思う。ほら病は氣からって言うだろ・・・関係ないかもしれないが。

俺こと秋山大介が生まれ故郷でもあるこの村に戻ってきたのは小学三年生以来、実に八年ぶりのことだった。この村は山の奥の奥にあるいわゆる一つの秘境というやつだ。バリバリ過疎化進行中のド田舎でこうして散歩していても人に会うことはおろか車道を通る車にすれ違うことすら稀な土地である。俺たちの家族が引っ越した後にも親父の母親、すなわち俺の祖母が住んでいたんだが数年前に他界してしまった。幸い、そこそこに金のあつた親父は祖母の家をそのまま別荘のような形で維持した。そして高校二年になって少し時間に余裕ができた今年、一人で帰省する運びとなった。理由は・
・たまには一人旅でもしてノスタルジイな気分になりたいし
まうお年頃だったからとでも言うておくでしょう。まあもちろん墓参りはする。他には深い意味はないし意図もない。
半分が思いつきの旅行だった。

さすがにあの頃の記憶はほとんど残っていないがこうして朝の優雅な散歩を楽しめるのは多少なりとも大人になったのかな、などと自惚れていられるのは午前中の話だった。

所詮は十七歳、成人式はそれなりに先の話で法律的にはA Vも見

こともゆるされないひよつ子である。迂闊だった。

一旦、昼食をとってから再び散歩してしばし、天候があからさまに怪しくなってきた。恐るべき入道様がもくもくと立ち上り、空は青から灰色へと塗り替えられてしまった。

山の天候は変わりやすい、というよりそれ以前の問題だ。夏場の夕方に突然の通り雨なんてのは別に田舎特有でもなんでもない常識だ。天気予報くらい見ておくんだっとな、と今更考えつつ、走って帰るかどうか思案する。濡れても放っておけばすぐに乾くとは思う。しかしだからといってこのままありのままに大自然の恵みを受け入れてしまうのも人としてどうかと思う。

先進国日本の一国民として文明の利器（この場合、要するに傘）に準ずるものを探すか、創り出すかしてみせる。

・・・くだらないことを考えている間にもう今にも降出しそうな空気が漂い始めている。きよろきよろと辺りをも見回しているうちにふと既視感に襲われた。以前もこんなことになった気がする。

確かあの時は・・・そうだ、確か蝶々を追っかけて道に迷った時に今日みたいに夕立に遭ったんだ。雨から逃げるように走って走って、小屋を見つけたんだよ、今にも崩れそうな掘っ立て小屋を。

歩道を外れ、わずかばかりの記憶に頼って林を突き進む。ポツリポツリと雨粒が落ち始めたかと思うと、すぐにザーツという荒々しく強い雨足になった。だが俺は止まらなかった。どっちにしろあのまま馬鹿なことをやってれば濡れただろうし、せつかく思い出した小屋を一目見たかったからな。

十数分後、案外苦戦したものの思い出の小屋は見つかった。八年前と変わらないオンボロだった。

もうすでにずぶ濡れだったがのんびり外で眺めようと思えるほど鈍感ではない。そそくさと中に入ると驚いたことに先客がいた。長い黒髪が印象的な少女だった。

入り口一つの四人もいれば手狭に感じるほどの空間しかないと人が入ってくれば向こうも気づくだろうし俺自身真っ先に彼女を見つけたわけだ。それ故、必然的に目が合った。この上ないくらいばかりと。せっかくなので観察してみる。見たところ俺と同年代のようだ。ますます珍しい、遭遇率は四葉のシロツメクサ並みに低いはずだ。なにせ俺が通っていた小学校では同じ年の人間が一人もいないほどに少子化が進んだ土地だからな。容姿に関しては、うんかなり可愛い。人形のように整った顔立ちと白い肌に加えて、少々雨に濡れた長い黒髪に艶が生まれ、これぞ和の美人といったところである。しかしどこか見覚えがある雰囲気があった。芸能人ではない気がするのだが。

「こんにちは」

しばし観察したものの、結局ここにいるのは雨宿りのためであろうことぐらいしかわからなかったのでコンタクトを試みることにした。「・・・こんにちは」

どこかおびえているような声色ではあるが、とりあえず応えてくれてよかった。無視されたら立ち直れなかっただろう。

「降ってきちゃいましたね」

降り始めたのはだいぶ前だがな。特にこの場に合ったフランクな話題が思いつかなかったんだから仕方ない。

「そうですね・・・大丈夫ですか、ずいぶん濡れてますけど」

言うなり手元にあったバッグからハンドタオルを取り出して

「よかったらどうぞ」

につこりと微笑を浮かべながらすつと差し出してくれた。いい人だな。

「すみません」

素直に受け取り気になる部分（具体的には顔とか腕とか肌が露出している箇所）だけ軽く拭いてお礼とともに返却した。

「もついいんですか」

「はい、ありがとうございました。あとは自然乾燥で十分ですよ」
「ふふっ、面白い人ですね」

面白いだろうか。確かに自然乾燥は日常会話にはあまり出てこないかもしれないが。まあ初対面でも打ち解けられる社交性溢れる俺だからこそ自然に笑いを取れてしまうのだ・・・ということにしておこう。

「私、人と話すのはそんなに得意じゃないですけど少しおしゃべりしませんか」

優雅な動作で唯一の窓の側に移動してゆつくりと空を見上げた。彼女に倣って見上げた空は相も変わらず厚い灰色の雲に覆われていた。雨はまだ止みそうに無い。

「秋山大介。高二。できれば下の名前で読んでくれると嬉しいです」
まず自己紹介するのは礼儀だと思う。苗字で呼ばれるのはなんとなく嫌いだ。

「じゃあ大介さんで・・・浅川けい。憩うと書いてけいです。高校二年生」

タメだったか。なら遠慮は要らないな。

「敬語じゃなくていいかな、慣れなくてさ」

いきなり態度が変わったとかそういう突っ込みは無しだ。基本的には粗野でいたいんだよ、疲れるから。彼女はくすりと笑って

「はい。その代わり私のことも名前で呼んでくれませんか」

と言って来た。首肯で応えてやるともう一度微笑んで次なる話題を振ってきた。

「どうしてこんなところにいらっしやったんですか」

「昔、小学生の頃に迷ってこの小屋を見つけたんだ。ちょうどそのときも今みたいに雨宿りしてた。でもこの小屋って結構わかりにくいところにあるしちよつとした秘密基地みたいな感じで時々使ってたんだ。俺、この村出身なんだけど小三の頃に引っ越してからしばらく帰ってなかったんだけど夕立でこの小屋思い出したらなんか懐かしくなつてさ・・・。」

「秘密基地ですか。確かに私も教えてもらうまではぜんぜん気づきませんでした。」

「へえ、このこと知ってる人がいたのか。」

うちの亡くなつた祖母でさえ知らなかったんだがな。まあ自分しか知らないことなんてこの世にいくつも無いだろう。

「でもよく来たな。結構奥の方だし何も無いぞ」

知つたからといってわざわざ訪れたところで別に何も無い。裸電球に机と椅子、それがこの小屋の全てだ。はっきりいって暇つぶしにしかない。

「この場所を教えてくれた人のお墓がこの側にあるんです。私はこの辺りの出身ではないですし、住んだことも無いですが父の知り合いの家があるのでお墓参りに来たんです。」

なるほど、そういうやそろそろお盆だったな。しかしここを知る人間なら少し会つてみたかったが亡くなつていたか。残念だ。

「以前に話を聞いていたのでついでに寄つてみたんですが本当に何も無いですね。・・・でもあなたに会えたからそこまで無駄ではなかったかもしれませんね」

たぶんあなたの後には面白いとか変わったみたいな形容詞が省略されてるんだろうがあえて言おう。

「・・・そのセリフはだいぶ恥ずかしくないか」

「もう、素で返さないでくださいよ。」

照れてそっぽを向く様も画になっている。意外に表情豊かな子だった。俺が笑うと彼女もまた笑う。穏やかな空気だった。

そういうええ昔も・・・あれ、なんだったつけ。こんな空気、前にも・・・確かにここで。

「ほたるか」

「はい？」

けいはきよんとする。確かにここにホタル（コウチュウ目ホタル科に分類される昆虫）はいない。俺の言うほたるとは

「昔の友達だ。俺の秘密基地をほたるって子だけには教えたんだ。」

今思い出した。」

その存在は思い出したものの具体的に何をしたのか。喉元まで出かかっているのに思い出せない。いや急速に記憶は戻りつつあるがまとまらない。

「俺が引越す直前の夏休みの中盤にたまたま会ったんだ。それまで同い年の人間に会ったことなかったからつい教えちまって、それから俺が引越すまで散々遊んだよ。」

「・・・そうなんですか。お話聞きたいところですが・・・」

けいは再び空を見上げた。雨はほとんど上がっていた。

「このあと少し用事があるんです。でもせっかくですし・・・それに実は私、付き合いみたいなものなので暇なんです。ですからもしよかったら・・・明日もまた、ここで会いませんか」

思いもよらない提案だった。俺も暇ではあるし構わないがどこまで思い出せるかわからん話に付き合わせるのはどうかと思う。しかし俺はこの短期間で彼女とこの穏やかな雰囲気に着かれ始めていたのかも知れない。

「うん、わかった。せっかくだもんな」

「はい、せっかくですから」

くだらない反復をして俺たちはまた笑った。なんか和むね。

「じゃあまた明日。うーん、三時くらいでいいかな」

「はい。わかりました。それでは」

けいが出ていってからも俺はしばらくそこにいた。忘れていた過去がくるくと甦り始めていた。

翌日、午前中を布団の中で過ごし、一時頃に家を出た。ここから真っ直ぐにあの場所を目指せば三十分も掛からずに到着するだろうが普通に散歩するのがここに来てからの日課になっているため家でじっとしていられなかった。

ぶらぶらと歩き回ってから遅れないように小屋へと向かう。待ち合
わせの十分ほど前に着いたがけいの方が早かった。

「こんにちは。」

「ああ、こんちわ。早いな、いつから居たんだ」

「うーん、三十分くらい前ですかね。暇でしたから」

そこまで暇なのか。きっぱり言い切られると逆に気持ちいいが。

「俺ももうちょい早く来ればよかったな。人と待ち合わせなんて滅
多にしないから加減がわかんなくてな」

「私もです。でも待たせるのは嫌だったんで少し早めに・・・いえ
別に大介さんを攻めているわけではないですよ。待つのは嫌いじゃ
ないですから」

必死な感じに思わず吹き出しながら

「お互い人付き合いは苦手らしいな」

「・・・そうですね」

「そっぴやほたるとはこんな風によく待ち合わせしたよ。どうにも
遅刻が多いやつだった。」

俺は昨日今日で思い出したことを語り始めた。とりあえずはほたる
の人物像から。

陽気で明朗快活なおてんば少女、それがほたるだった。ショートヘ
アがよく似合っていて、顔立ちは整ってて、そうだな、けいによく
似てた。なんでも夏休みの初めに越してきたらしくて出会ったのは
本当に偶然だった。俺にも友達がいなかった、というかこの村に子
供がいなかったからな。それから俺たちは毎日のように遊んでた。
もう出会った時から親友になってたのさもしれない。男の俺に真っ
向から文句言ってきて口喧嘩はしょっちゅうだったよ。でもなんか
走り回ったりするのは得意じゃないらしくて一番よくやったのは釣
りだったかな。

とまあこんな感じの内容を結構な時間をかけて話した。途中途中で

けいは相づちを打ったり頷いたりして熱心に聞いてくれた。近年稀に見る聞き上手で俺としてもかなり話しやすかった。まあ顔立ち云々の話で赤くなって困惑してたのはいうまでも無いだろう。

しかし時々見せる笑みがほたると重なりかけていてどうにも変な感じだった。致命的にもほたるの苗字が思い出せない。もしかしたら同一人物かとも思わないことも無い。それほど彼女とほたるは似ていた。があくまで似ていたと感じるだけで確信に変わるような事象は無かった。

そんなけいが初めて内容に突っ込んできたのが釣りの話だった。

「釣りですか。もしかしてその川ですか？」

「そうそうすぐその川。正式な名前は知らないけど俺たちは小早川って呼んでた」

ここから歩いて数分のところに川がある。

「・・・ずいぶん変わった呼び方ですね」

「まあな。実際、人の名前だし」

けいは消化不良を起こしたような顔をした。言葉が足り無すぎるからしょうがない。

「俺の学校の先輩に小早川さんって人がいるんだ。で、あの川って一見穏やかなんだけど結構流れが速くてな。その二つの理由から付けた愛称が小早川。なかなかシャレてるだろ」

ダジャレというか親父ギャグに近いけど小学生としては面白い名前をつけたと思うんだが・・・

きよとんとされると困るな、さっさと話を進めるか。

「小早川は水がすごいきれいで・・・見たならわかるか」

「はい。すごく澄んでて山奥だなあって思いました」

どこか偏見のようにも思うが実際あの川はきれいだし、余計な突っ込みは止めとくことにしよう。知らぬが仏ってこともあるだろうし。「うん。だからなのか知らないけどあそこは結構釣れるんだ。特に

鮎がうまい」

「急に味の話になってますが・・・でもいいですね、天然の鮎なんて」

「あれは絶品だぞ、ワタが少し苦いけど。何なら行くか？」

じぶんでもこんなことを言い出すのは意外だった。この子は例えていうなら親戚とか親友の友人みたいに面識が無くても信頼できるような気がする。けいは少し思案顔を見せてから小声で

「・・・迷惑でないなら」

と答えた。

今日は集まるのも遅かったのでまた明日ということ解散した。帰り道、釣竿をどこにしまったか考えているふとあの頃のことを思い出した。釣りをして遅くなった時の話だ。

「暗くなっちゃったな」

ほたるは呼びかけに応えず突然道をそれて林に入ってしまった。わけもわからず付いていくとそこには小さな発光体がいた。

「ホタルか、珍しいな」

一センチにも満たないそれはぼんやりとした薄い光を放っていた。季節的には見ないはずなんだが、図鑑によるとゲンジボタルには時期外れだがヘイケボタルという種族は九月ごろまで発光するらしいのでたぶんそれだろう。

「きれいだね」

「ああ。ホタルなんかめったに見ないけどこんなにきれいなんだな」より正確にいうならホタルが放つ光は、だが。昆虫本体はきれいとはお世辞にもいえない、むしろ台所の黒い悪魔と似たり寄つたりの代物だがこの幻想的な光の前でそんな無粋なことはいえなかった。

「ふふつ、あたしみたいに可憐でしょ・・・ってため息つくんじゃないわよ、あんた」

「へいへい、可憐でございますよ」

「・・・頭きた。」

そして天にかざした手を俺めがけて振り下ろして・・・。

ほたるとホタルの競演か。あの時期にホタルを見たのは俺も初めてだったし新鮮だった。ほたるは今何してるんだろうな・・・そこで気付いた。

蛸。自然に浮かんだ漢字だがこれってケイとも読むよな。・・・偶然なのか。それにしても出来過ぎじゃないか。・・・顔立ちはとも似ているが性格や仕草はだいぶ違う。しかし名前はほたるとけい今思えば初めに憩うと書いてけいなんてわざわざいう必要あったんだろうか。わざと悟らせないように仕向けたと考えられなくも無いだがそんなことをして何の得がある？

まあ謎は多いが彼女といることは楽しいし余計な詮索は避けよう、と自分に言い聞かせ再び釣竿について考える帰路だった。

翌日、九時頃にここら一帯唯一の店でエサその他もろもろを買い足して十時前には小早川に着いた。やはりけいは先に来ていて川原の岩に腰掛けていた。

「おはよう」

「・・・おはようございます。川って見てるだけで和みますね」

川を見つめる彼女に見とれそうになりつつ、適当な返事をしてそくさと釣具の用意をする。まあ俺自身釣りに詳しいわけではないし、竿も粗末なものだ。加えて普通にエサをつけて糸を

垂らすだけだからな、魎鮎とかは使わない。釣ればラッキーくらいのもんだ。

あらかた準備を終え適当に釣り始める。

「実は釣りつて始めてやるんですよ。ちょっとワクワクしちゃいます」

「そうなのか。釣ればいいけどな。まああんまり期待するな。」

「はい。・・・でもやっぱり期待しちゃいますよ」

「・・・神様に言ってくれ、俺にはどうにもできん。でもどうせ二人で話してるんだつたらおまけが付くかもしれないこれの方がいいだろ」

事実、俺はほたるがいない時は魚が食いたくなつた時しか釣りなんかしなかった。一人でやって楽しむにはもう少し年齢を重ねる必要がありそうだ。

「しかし本当に暇なんだな」

「はい。親以外に知り合いはいませんから。それに大介さんの思い出話は面白いですし」

「まあ俺も一人で来たはいいけどこんなにやること無いとは思わなかったからありがたいけど。昔は飽きずに虫捕りなんかやったもんだが俺ももう若くないらしい」

今は捕まえたところで処理に困る。魚と違って食えないからな。

「若くないって・・・同い年ですよな」

「ああ無邪気なああの頃に戻りたいぜ」

「そんなしんみりされても・・・」

「さて、魚釣りにまつわる話だが・・・」

「急に切り替わらないでくださいよ、もう」

コントのようなやり取りを経て話し出したほたるとの釣りに関する話を始める。大方がほたるとの競争や喧嘩の話だった。獲物の大きさだったり数だったり珍しさだったりさまざまなことと言い争ったことを語りつつ当たりを待った。他愛ない話もけいは熱心に聞いて時たま質問も返してくれた。時間は早送りのように流れ、いつの間にか夕方になった。昼食の直後に釣れた一匹のみと釣果は優れなかったもののボウズを免れただけよしとしよう。以前はうちにあつ

た七輪を持ってきてこの場で焼いて食べていたが急で時間が無かったため七輪が見つからなかった。このままけいに持たせて家でゆくり調理してもらおうとしよう。俺は特に鮎が食いたかったわけではないので遠慮するけいに無理やり持たせてやった。

「・・・では頂いて行きますね。」

「ああ。でもまだ帰るには早い」

「えっ？」

その他もろもろを調達していた際に懐かしくて衝動買いした夏の風物詩を袋から取り出す。

「・・・花火・・・ですか」

「やっぱり夏といえばこれだよな。でも何で花火って夏にやるんだ？火を使うんだから暑い今より寒い時期にやった方がいい気がするが」

「さあ？知らないです。でも納涼って言うくらいだから見入って暑さを忘れるってことじゃないですか？」

なんとなく釈然としないが確かに花火やってる最中に暑いとか抜かすやつはそういないか。

「まあいいや。細かいことは気にせず盛大にやろう」

「・・・自分で言い出したんじゃないですか」

とりあえず置いといて（棚上げ）ぶつぶつ言うけいに花火を押し付け、持って来たライターで火をつける。シュツという音とともに火柱が上がる。いや手持ち花火だから上がるってのが正しいかは知らないが。

「うわー、綺麗ですね」

「だろ。なんだかんだで打ち上げよりこっちのほうが好きなんだわ、俺」

同じことをほたるにも言った気がする。昔からみんなでわいわいやる手持ちの方が好きだった。

毎年行われていた学校を挙げての花火大会をいつも楽しみにしてい

たのを覚えている。

俺たちは最初に付けた火種が消えないように花火から花火へとバトンを続けた。そのたびに見せる彼女の笑顔はむじゃきで可憐な……あの頃のほたるのようだった。

あまり量を買ってなかったので花火はすぐに尽きてしまった。がそれから珍しくけいから花火の思い出を話してくれた。小学生の時に何人かで集まって行った花火大会、初めてネズミ花火やロケット花火、ナイアガラを見た時の感動や線香花火の不思議さについて語ってくれた。花火のこともさることながらこれまでけい自身のことほとんど教えてもらっていなかったたので純粹に嬉しかった。

「楽しかったです。ありがとうございました。明日もいいですか？」

「おう、もちろん。そうだな、二時くらいに」

「はい。わかりました」

「よし。じゃあまたな、けい」

そのまま別れてすっかり夜の帳に包まれた帰り道。

場所は言うまでもない。本当に昔に戻ったような気分だった。それにけい……けい？

俺はほたるのことをけいって呼んだことがあったような気がする。

いやあった、確実に。

確かあれは蛍光灯の漢字がホタルだということを知って試しに呼んでみたんだ。それで

……思い出せない。記憶に靄がかかったようにその先が出てこない。

だがこれはもはや偶然とは思えなかった。というよりもうけいがほたるだという確信が生まれていた。直接確かめてみよう。

翌日、遅刻ぎりぎりに目が覚める。昨日はなんだかんだで記憶を取

り戻そうとかなんでけいなんて名乗ったのか等々考えていたら朝になっていた。考え事で夜を明かした場合、陽の光をみると急に眠気に襲われるのがこれまでの経験からわかっていたので逆らわずに床に就いたらかなりデンジャーな時間だった。最低限の動作で最低限の支度を整え家を飛び出す。

たどり着いたのは数分遅れてのことだった。

「わりい、寝坊した」

「こんにちは大介さん」

「おっと、こんにちは」

挨拶も忘れるとは失態だ。全力疾走で脳に酸素が回ってない。

「少しくらい気にしませんよ。少し息を整えてください」

勧められるがままにイスに座る。ああ、自業自得とはいえ疲れた。とりあえずこの場は何か適当な話題を振ってみるか。

「なあ、けい」

「なんですか？」

「俺さ、昨日思い出したんだ。ほたるのことをけいって呼んだことがあることを。なんでけいって呼んだのか、呼んでから何か変化があったのかはまったく思い出せないけど確かにそう呼んだんだ。それにさ、やつぱりほたるに似すぎてるんだよな」

「・・・・・・」

つておいネタ振りのつもりがいきなり核心突いちゃったよ。もう引けないな、こりゃ。

「別に怒ったりしないからさ。本当のことを言ってくれよ。お前がほたるなんだろ？」

けいはいきなりすることに驚いてか数秒だんまりしてからくすりと笑った。

「ふふつ、私はけいですよ。憩うと書いてけい、です。私は大介さんには一度もうそは言ってません」

「でもっ！」

「しかし全てを語ったわけでもありません。もう全てお話しますか

ら、落ち着いて聞いてくださいね」

そういつて穏やかに笑う彼女は三日前に出会ったのままだった。

「私は浅川憩、これは間違ひありません。しかしこの憩うという漢字は当てはめられたものです。私の両親は子供ができた時女の子だったらホタル、男の子だったらケイと読ませて幹事はどちらにしろ蛭という字を当てるつもりだったそうです。・・・結果は予想外のものでした。女の子が二人、つまり双子だったんです。そこで姉には当初の予定通り蛭と書いてホタル、妹には男の子につけるはずだった読みだけ残してケイ、女の子らしい漢字を探して憩を当てたそうです」

「それって・・・」

「はい。大介さんが幼い頃に出会ったほたるさんは私の双子の姉、浅川蛭です」

「・・・」

そういうことか。盲点だった。言葉を見つけれない俺をよそにけいはさらに話し続ける。

「そもそもあなたと出会ったのは他でもない姉のおかげなんです。あの小屋は大介さんが引越してもお姉ちゃんのお気に入りだったんです。私がお姉ちゃんが引越した年の冬休みに教えてもらいました」

「・・・ちよつと待て、お前にここを教えた人間は・・・」
確かもう・・・。

「はい。・・・お姉ちゃんは二年前に亡くなりました。元々この村に来たのも生まれつき弱かった心肺にいいからということでしたから。」

何を言えばいいかわからなかった。衝撃が大きすぎてさすがに軽口も出てこない。

「お姉ちゃんの心臓と肺は本当に弱かったらしいです。中学生に上がるまで生きてられないって言われてました。でもこの土地がよかったのか、あなたと出会ったからなのか、中学校三年の夏休みま

で生きていてくれました。」

「俺と出会ったから？」

俺と過ごしたのはただか一ヶ月。特別なことはしていない。当時はほたるがそんな体が弱いなんて知らなかったはずだし。

「私とお姉ちゃんは本当に対照的でした。社交的なおねえちゃんと人と話すのが苦手な私、勉強が苦手なお姉ちゃんと好きだった私、ショートヘアでないと動きづらいつてたお姉ちゃんと長い髪じゃないと落ち着かない私。とにかく反対な部分が多かった。遺伝子的に顔立ちは似ていたし同じ環境で育ったから似たような所作もあったかもしれませんが内面は正反対だったんです。お姉ちゃんは比べられることがすごく嫌だったみたいです。もちろん私のことは大切にしてくれましたよ。私もお姉ちゃんが大好きだった。

でもうちの両親はちよっぴり過保護だったんですね。社交的とか明るくて人付き合いのいいお姉ちゃんも生まれつきの病気のせいであまり外に出してもらえなかったんです。それを見かねたお医者さんが父の友人と協力してこの村に姉を引っ越させたんです。久しぶりに会った冬休み、お姉ちゃんは目に見えて元気になっていました。学校での出来事や休みの日の山での過ごし方などを嬉しそうに話してくれました。その中で一番長かったのは一番最初にできた友達、いえあった瞬間から親友だったといってたね、秋山大介という同じ年の男の子の話でした。それから夏と冬の年二回ずつしかお姉ちゃんとは会えなくなっちゃいましたけどいつも欠かさず出てくるのはあなたの話でした。

記憶に無いといっていたところはいい思い出ではないからだと思います。さっきも言いましたけどお姉ちゃんは比べられるのが嫌いでしたから、あなたがケイと呼んだときつい、かつとなってしまうたです。そのせいで発作を起こしたらしいです。」

「・・・思い出した。急に苦しみだしたほたるをあわてて家に送って、それから何日かほたるは外に出られなかったんだ。だけど俺はもう引っ越さなきゃいけなくて・・・」

けいは穏やかな表情を崩さず俺が思い出すのを待ってくれた。後一歩なんだよ。

「・・・そうだ、『必ず帰ってくる』って約束したんだ!」

「そうです。お姉ちゃんは『あいつが帰ってくるまでは死ねない』って言うてました。」

じゃあ俺は間に合わなかったのか。それどころかそんな大事な約束を忘れて

「馬鹿だよな、俺。ほたるに合わせる顔がねえよ」

しかしけいはゆっくりと首を振ってハッキリと言った。

「お姉ちゃんはあなたがいてくれたおかげで幸せだった。たとえ約束を忘れても思い出はおねえちゃんの中で生きていました」

「・・・・・・・・」

俺は・・・馬鹿だった。口を開けば自虐の言葉しか出ないだろう。でもけいの言葉を無にしたくなかった。だからだんまりを決め込んだ。

「お姉ちゃんは最後に私の心配をしていました。自惚れでなくそうだと思います。私は友達らしい友達がいませんでしたからそれをずっと気にかけてくれていたんです。中学二年生の夏に夕立が降ったらあの小屋に行つて見ろと言われました。本当にお姉ちゃんが言つてた大介君に会えて本当嬉しかったです。反面怖いとも思っていました。私は平然とした態度を装つて受け流すことで人を拒んできましたし実際そうするつもりでした。いくらお姉ちゃんの知り合いでもあなたは私を知らないから。でもあなたはどこか放っておけない雰囲気があつて受け流せなかった。受け止めてしまった。やつぱり・・・」

けいは瞳いっぱい涙を溜めて話し続けた。俺は何にもしてやれずに立ち尽くしていた。

「やつぱりお姉ちゃんが言つてた通りでした。だから私ももう」

「わかった。もうわかったから」

俺はそつと腕を伸ばしてけいを引き込んだ。もう十分伝わった。ほ

たるの遺志とけいの決意は俺に届いたから。

「明日ほたるに報告しよう。なっ？」

「はい・・・はいっ！・・・」

しばらく泣きじゃくるけいを抱き締めた。この子は俺とほたるのために無理して頑張ってたんだモンな。俺には慰める義務がある。いやそんな堅苦しいものじゃない。俺自身が浅川憩に泣いていてほしくなかった、ただそれだけだったのかもしれない。

俺達はほたるの墓の前に来ていた。軽く手を合わせてから。

「毎年一緒に来ような、ほたるの命日」

「はい。もちろんです」

「ねえ、お姉ちゃん。言ってた通り大介さんはすごくいい人ですぐに友達、ううん、親友になってくれたよ。だからもう心配しなくていいからね」

「ごめんな、ほたる。すっかり忘れてたよ。まあ期間が短かったんだから勘弁してくれ。お前が覚えてくれてたのは嬉しかったよ。お詫びにつてわけじゃないがお前の妹さん、いやけいは俺がしっかり見守ってやるよ。・・・思えばお前もいつの間にか親友だったが遺伝子なのかね、けいも驚くほどすんなり親友になってたよ。もしかしたら親友よりさらに上の関係になるかもしれないがゆっくり見物してくれ。なに、あと百年もしたらそっちに行くさ」

「なんだかんだ図々しいですね・・・じゃなくて、親友の上って・・・」

頬に朱が差し照れるけいにつはいいたずらしたくなってしまっ。

「こんなんだろ」

額そつと唇を当てる。

「えっ、その、あうあうー」

おお、混乱してる、混乱してる。

「もういきなり何するんですか。いきなりおでこに、き、キ、キス
って・・お姉ちゃん」

「ははっ」

八年前の夕立から始まったちょっと変わった関係。ほたるにはもう
何もしてやれないけどそのほたるが引き合わせてくれたけいとそれ
なりに楽しく生きていこう。またほたるにあえる日までは。

「待つてくださいよ、大介さん」

「わかった、わかった」

それまではだいぶ時間が掛かりそうだ、気長に頼むわ。

「はいはい、私の分まで存分に生きなさい」

「えっ？」

けいと顔を合わせて沈黙した後、二人で笑いあったのだった。

I N

F

（後書き）

読了感謝いたします。

この作品は（極々身内の）ちょっとしたイベントのために書いたもので、もしかしたら知っている人もいるかもしれませんが。その時はそつと見過ごしてやってください。

構成力の無さから強引な部分も多々あったでしょうがご容赦いただけるとありがたいです。また感想批評がありましたらぜひお願いいたします。

では、次回作で会えることを楽しみにしています。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7742e/>

いつかの夕立

2010年10月24日01時50分発行